

神殿復興について

第45回追悼式語り部 中川種次郎

ただいまご紹介いただきました、中川でございます。

昭和七年徴集補充として在郷軍人会に入会し、第一回の総会には三島鴨神社内に建立されている皆さんの眼の前の「表忠碑」の前で戦死者の慰霊式が行はれていました。この表忠碑は他の町村では大方「忠霊碑」となっています。この碑の表は陸軍大将福島安正の書で、裏は藤沢南岳撰文、大正八年九月書とあります。当時の在郷軍人会は松村亀次郎様や葉間博太郎様の賢明な御交術の賜と云えましょう。

私は昭和十四年十二月四日応召、葉間村長に激励をうけ、三島鴨大神に武運長久を祈って出征しましたのもなつかしく思い出されます。

三年六月、中支戦線にて支那事変から大東亜戦争に参加、幸い昭和十八年六月に帰還でき、その後は、三箇牧青年学校指導員となり、昭和二十年八月十五日終戦を迎えた者でございます。終戦後は敗戦日本の農業を守るため農民組合あるいは自治会のためにお役をつとめました。

在郷軍人会は解散され、次々と戦死者が増えて、やがて自治会連合会で慰霊祭を行うことになりました。昭和五十年十月五日の第十三回合同慰霊祭で、私が委員長として終戦三十周年にも当り、碑前の追悼の辞をのべた感激が思い出され、かつ、本日久しぶりに追悼式に参会させて戴き、御遺族の皆さんとお会い出来きますことは、九十五才の長命を得た、戦中戦後生きぬいてきました私の人生を省みて感無量でございます。

さて、本日私に与えられた語り部の題は、「神殿復興」でございます。我が三島鴨神社は日本でも一番古い歴史を持っていますが、社殿については記録が残っておりませんので、昨年長年にわたり春秋会として神社史が発行できましたが、社殿について編集に折り込めなかったのが残念でございました。

私個人として二十才頃から郷土研究をはじめ、勝田為義宮司とも懇意をうけて来ましたが神社にはオキテと云いましょうか、先ず神殿をして鳥居境内に依って神社の格をつけられるものです。

三島鴨神社の歴史をひもといて昔をたどってみますと、西暦四三二年仁徳天皇難波の宮より淀川上流に舟神としてお声がかかりがあり、淀

川の左岸に茨田堤を築いて河内平野を守り、上流中島に水を守る神大山祇神をおまつりされたのが始まりでした。元慶八年十二月(884)神位記陽成天皇記に記載があり、延喜七年(907)に延喜式制度に三島鴨神社も入っており、治承(1175)時代高倉天皇皇子宝神として行幸を受け、寿永元年(1182)安徳天皇が京都下鴨に三島神社(別格)を造営されています。

慶長三年九月(1598)豊臣秀吉の命により、小早川隆景、吉川広家により淀川右岸伏見大阪の堤完工、三島江に東西十二間半、南北四九間、一反六畝、末代年貢米免除として現在地に遷宮され、大鳥居は伊予の守献上と伝えられています。本社前の常夜燈は、寛文七年十月吉日西面村川東御膳講と眞西ノ繩講の二対が建立されています。お祭には今もなお提灯も奉燈されています。伝えて曰く“西面氏子が宮元”と!

巻物としては教法十五年(1930)に宇治兵部藤原延真筆の神社記が保存されています。古木としては松林の他、エノ木二本が高槻市古木百点に、玉川堤のエノ木と共に慶長時代に植えられた木であろうと入選していましたが、平成十六年に三本とも枯れはてたのは惜まれています。



神殿については何の文献も残ってはいませんが、勝田為義宮司から聞き伝えでは、明治時代に入江酒造家から土地と共に境内も立派に社務所も建立され、神殿のカヤ葺きは、伊勢神宮の払い下げをうけて来たと伝えられています。淀川中島時代は淀川の葦を利用されていたのではないかと思います。

新しい時代、松井光久宮司が大修理を行い神殿は銅版を加えての工事となりました。昭和二十年七月九日太平洋戦争敵のP51の射撃で拝殿が焼失、昭和三十八年九月十五日再建、平成七年一月十七日阪神大震災の震度六で大鳥居が倒壊、平成八年十月鳥居再建され、平成十八年四月には神社史が、編集は宇津木秀甫文学者を主体として編集委員会制で一九二頁の大冊で立派に発行できました。

以上簡単に歴史を申してきましたが、尊い歴史をもつ三島鴨神社の信者として、神社が益々栄ますと共に平和祈念式も益々意義ある行事になりますよう祈念して私の話は終わります。

ありがとうございました。